

# PHD LETTER

## 67

PEACE・HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT 1998・6

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじまりました。

- 東西南北問題取組日記…………… 2 P
- 15、16年前の研修生に会ってきました…………… 6 P

発行：財団法人PHD協会 理事長 今井 鎮雄  
編集人：藤野 達也  
住所：〒650-0022 神戸市中央区元町通5-4-3  
元町アーバンライフ202  
TEL (078) 351-4892 FAX (078) 351-4867  
定価：100円



日本はハイテクの国らしいけど  
魚はどうやってとんの？  
ここじゃ腰のバッテリーから水に電気を流し  
しびれた魚を捕まえるんだ。  
今夜のおかずだから沢山とらなきゃ。

フィリピン ヌエバエシーハ州 ガバルドン 撮影 FUJINO.T

# 東 西 南 北 問 題 組 日 記

4月×日

けさ、東京のあるNGOの責任者が事務所を訪ねて来られた。はるばる何かと思えば次のようなことだった。「阪神・淡路大震災や日本海の重油回収など、ボランティア活動の盛り上がりや特定非営利活動促進法案（NPO法案）の可決で、一見、NGOの活動は順調のようだけれど、現実にはきわめて厳しい。この状況に対して、個々のNGOの頑張りだけでなく、NGOが集まり業界全体としての打開策を検討する機会をもちたい」とのこと。

日本の経済力が強まる中で、国際社会に対する責任、役割が増し、私たちの税金による政府開発援助（ODA）の額も大きなものになった。しかし、その中身にはいろいろと問題もあり、そこからもうひとつの国際協力としてNGOに期待がかかったところがあったし、NGO自身もそれを意識していた（少なくともPHDは）。

でもODAのすべてが間違っているものでもないと同じようにNGOの活動のすべてが正しく、素晴らしいというのではないことが見えてきてしまった。お金の出所が税金ではなくて会費や寄付という違いだけで、中身は似たような発想、方法のところも多い。それも、資金が外務省のNGO事業補助金からもらえるようになったり、郵政省の国際ボランティア貯金から助成金ができるようになったりすると、どこに差があるんだということになってくる。国際協力を評価するのはODAだからとかNGOだからとかではなくて、その中身がどうかという点だと思うけど、さらに言えば「善意」から一歩ふみだした協力とは何かを考える必要がNGO側にあるのは事実だろうと思う。

5月〇日

スハルト大統領が辞めた。ウチの事務所にもいくつかの新聞社から問い合わせがあった。夏にスマトラへのスタディツアーを予定しているが、ほんまにしはるんですかとの問い合わせも2～3件。危険なら中止だけど、今のところはやるつもりと返事。そのツアーの下打ち合わせ

も兼ねて、西スマトラ、パダン市にいる元研修生の一人アフナル君に連絡をとってみた。日本のマスメディアの情報には小さな町の様子は引っかかりからない。彼によればパダンでも学生のデモがあり、金持ちの中国人は早々にシンガポールに逃げ、それができない中国人が家にこもっている、日本人も皆いなくなったそうだ。彼らにも今後どう政治が推移していくかはわからないけど、少なくとも物価が下がってくれないと、と言う。米は1.5倍、食用油や石鹸は2倍になったそうだ。

これ以外にもインドとパキスタンの核実験の張り合いや、フィリピンの新大統領といった大ニュースやら、日本政府がビルマにODAを再開する話まで。遠い外国の出来事の報道も研修生の存在でも身近になる。

6月〇日

神戸市灘区の工場跡地が再開発され、新しく建てられたビルにWHO（国連の一機関、世界保健機構）をはじめ国際関係の事務所が入る国際健康開発センタービルがこの4月にできた。その中にある兵庫県国際交流協会に出かけた。7月にイギリスから招く開発学の先生ローレンス・テイラーさんの講演会の打ち合わせだ。ここのセミナールームを使っての5日間のワークショップと、それとは別に15日に講演会を予定している。ローレンスさんは、私が93年に11週間「Development Studies Course」を受講したパーミンガムにあるセリーオーク大学の先生だ。11週間で5日間に凝縮して、関西のNGOで働く人やそれを目指す人たちに開発をどう考えるか、どう進めるかを学んでもらおうという企画だ。もちろん当協会の職員研修でもある。

PHDはアジア・南太平洋地域の草の根の人々の研修事業を中心にしているが、これに併せて日本の人たちが、開発や国際協力にもっとかかわるようになるための働きかけや、日本のNGOの国際協力のレベルアップにもつながる役割も微力ながら担ってきたい。今回の招へいも対象をNGO関係者としたもの、広く一般向けの講演（兵庫県国際交流協

会）、学校とタイアップした公開講座（頌栄人間福祉専門学校）、講義（神戸大学大学院、名古屋大学大学院）、さらには大学の先生との懇談（関西学院大学）など幅の広い場の設定ができた。この企画を通して日本とアジアのつながりに加え、ヨーロッパの開発にかかわる人たちとのネットワークも広げていきたいと思う。今回の企画が成功すれば、来年以降も、さらに関西以外でも行えるようにもってきたい。以前から思っていることだけれど、NGOの活動を客観的に見る必要だし、それが可能となるいい機会としたい。

その打ち合わせの折、団体運営についても話が及び、どうやって収入を得るかが話題となった。PHDは財団法人ではあるが基本財産も少なく、しかもこの低金利ではその利息収入はわずかだ。活動資金の7～8割は会費と寄付によって支えられている。これまではなんとかやってこれたが、今後についてはやってみないとわからない、というのが正直なところだろう。しかし、ウチの中心事業はウチの活動を理解し、賛同して下さった方々の支援でやりたいとの思いは変わっていない。支援の拡大を目指し、その努力は怠らないつもりだが、器以上のことを盛り込んで無理することもないだろう。政府系の助成金やボランティア貯金という手もあるけれど、もらうにしてもスポット的な事業に留めておこうと今は思う、と話した。

不景気だとか言われているけど、逆に見れば無駄な消費をしてない、できないともとれるわけで、必ず右上がりの経済成長を保證されたものではないことをどうとらえるか、ひとつの時機かとも思う。

そうとはいえ、6月はPHD会費をお願いする月。今回の会報発送時には会費のデータを同封させていただく。

提唱者岩村昇先生が17年前の6月、ブラジル、サンパウロでPHDの発足をスピーチした。初心に戻るとともに、皆さんには今年もPHDを支えて下さるようお願いしたい。

総主事代行 藤野 達也



「だいたい硬く、時には柔らかくがいいようで」

1. 藤野達也 '82.4.～  
195×年3月 長野県飯田市生まれ、静岡市、名古屋市育ち。東京暮らしを経て神戸へ。
2. 過去20人（現役を含む）の職員の第1号職員ですから一通り何でも。最近海外交渉、研修生選考、講演、資金集め、同業他団体との共同事業等から事務所の床拭きまで。
3. 会社勤め4年目の冬、できたばかりのPHD協会のネパール、フィリピン第1期生出身地域下見ツアーに加わり、帰りの機内でドクター岩村に口説かれ、職員に。独身寮の食堂にあった他人の新聞でPHDの記事を見つけたばかりにこんなことに。
4. 続出する世界の、地球の問題に対し、人間の取り組みが有効である可能性を持続することができるか否か。
5. 幅広い層にアジア・南太平洋地域の人々への理解を持ってもらおうと写真、漫画、音楽、踊り、格闘技等の人脈にもせまる、一歩間違えばアジアをうろつく怪しいブローカー？

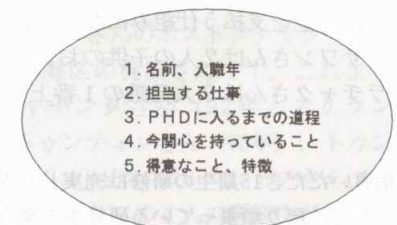
「特に6月は会費の入り気が気になります」

1. 小松みち '91.4.～  
196×年4月 堺市生まれ、芦屋市育ち
2. 研修以外の全てにからむ。ボランティアの皆さんとの連絡・調整、事務仕事全般総括、会報編集・発送段取り、セミナー・ワークショップ等の企画運営。
3. 2つの職場を経験。利潤追求第一は性に合わず、人と人のつながりから何かを生み出す仕事を期待してPHDへ。友人で同業他社の職員から募集情報を得て。
4. 日常生活の中で知らないうちに、失くなってしまいそうなこと、変わっていていることを気にかけたい。私はケータイや電子メールより便箋や葉書。
5. 人名、電話番号、出来事等のデータが瞬時に引き出せる、他の職員の外部記憶装置としても機能。風紀委員長も自主的に務める。

〇月×日でおなじみの・・・

## PHD職員はこんな人!!

年度がかわり事務所の体制も少し変わりました。草地さんが退き、17年目の藤野（総主事代行）、8年目の小松（主事）、3年目の谷（主事補）、2年目の田中（主事補）、伊藤（嘱託）の5人でやりくりをしています。仕事の量は同じかそれ以上を期待され責任重大。これまで以上に皆さんのご協力を必要とする5人を紹介します。



1. 名前、入職年
2. 担当する仕事
3. PHDに入るまでの道程
4. 今関心を持っていること
5. 得意なこと、特徴

「このレターは〇月×日だけではありません。他も読んで下さいねー」

1. 田中康代 '97.5～  
197×年7月 芦屋市生まれ、育ち。
2. 研修、啓発・広報を担当。活動を支えて下さる皆さんとの窓口。日々の領収書発行、バザー、イベントの企画・運営。この会報の入力、デザインも。
3. 学生の時、観光じゃない旅をしたくてある団体のワークキャンプでスリランカに。その時、次に行く機会があれば何か役に立つことを持ってと漠然と思った。会社勤めを始めても気になり続け、何かしたくて「関西NGO大学」に参加。そこで校長をしてたPHD職員藤野のリクルートにひっかかって。
4. 食べるのが好きなので、食物には関心がある。PHDに入ってからの食べ物にいろいろ問題があることがわかってきた。
5. 芦屋に住む田中家の娘さんだから「芦屋のお嬢様」であることは事実。大らかな仕事ぶりにはおまぬけも時折。



「〇〇さん、研修生の村へでかけましょうよ」

1. 谷朱子 '96.5～  
197×年11月 大阪府内生まれ、育ち。神戸在住。
2. 研修の担当。研修計画立案、研修・滞在先の調整、送迎、実施、評価と研修生関連行事を取り仕切る。外に出ること多し。研修生の希望、出身地域の必要とPHDが用意する事がかみ合って、PHDの研修が出来上がる。
3. 大学では国際関係学科で勉強しながら、4年生の時に、友人に誘われて、PHDには時々。国際協力に関わる仕事を一旦就職するも、そこに向かず、退職。丁度募集していたPHD国内研修生になり、さらに職員に。
4. 南北問題、その解決についてはもちろん、食べ物、農業、健康のことについても。最近、それにどう自分が関わっていくかが一番の関心事。
5. 初の女性研修生担当としてPHD史に名を残すことに。理事会のたびに研修移動に必須の運転技能を評価される。職員中、2番目のアルコール適応力。

「ホームページを作る助っ人いませんか」

1. 伊藤公男 '97.5～  
197×年5月 西宮市生まれ、育ち
2. 公益法人の運営に関わる総務、財務全般を主に、啓発プログラムも担当。低金利下にあつて、基本財産をいかに有効に運用するかという重大任務も。インターネット等コンピューターの新分野開拓が新しい仕事。
3. 学部生の頃、在日韓国朝鮮人の人権活動に関わり、日本とアジアの関係に興味を持ったところで、それを深めたく大学院に入学。たまたま、そこで、指導教官からPHDの募集を聞き、現場を知ることができるとして。
4. 国境を越えたモノ、金、人、情報の動きと人々の生活との関係。
5. 180センチを超える体格にもかかわらず、言動、立ち居振る舞いから、事務所ではおばさんに分類される。暗算に強く事務所の電卓。

ようこそ！ ~16期生来日~

4月18日に来日した16期生は、例年通り27日から6月6日までの6週間、神戸YMCAで日本語研修を行いました。全員15期生と同じ地域の出身なので、日本での生活について来日前にある程度聞いていて、滑り出しは順調です。

出身地域紹介

ゲオリ・カピンさん (女性、30歳)
パプアニューギニアの第2の都市レイから船と車で8時間、さらに歩いて5時間の所にあるマワネン村の出身。15期生ワニさんの村から歩いて2,3時間のところ。
ゲオリさんは1990年に推薦団体のルーテル教会開発奉仕部(LDS)が行う農業研修コースを受け、それ以降、伝統的な焼畑農業に加えて、堆肥を作り定着して行う農業を始めました。LDSは、今後の人口増加に備え、焼畑からの移行を勧めています。焼畑のほうが手間のかからない割に収量が良いため普及は簡単ではありませんが、ゲオリさんは、村の人から堆肥作りを教えると言われる事もあるそうです。自給用にイモ類、野菜、米を主に栽培していて、商品作物のコーヒーも作ります。

ゲオリさんには6人の弟がいます。

サワン・ナンタポーリスさん (男性、35歳)
プラチャク・ムアンチャンさん (男性、22歳)

2人はタイ第2の都市チェンマイから西へ150km、車で4,5時間のメーホンソン県から来ました。ビルマとの国境にまたがって住んでいる山岳民族カレンの出身です。プラチャクさんの村バンターカンとサワンさんの村バンペーは8kmしか離れておらず、生活、農業の様子はほとんど同じです。

6~11月は雨期の天水を利用し、自給のための稲作、その後は換金作物として、大豆やニンニクを栽培します。この地域には、農薬、化学肥料が既に入っていて、初めに種、農薬、化学肥料を買い、収穫時にその代金を支払う仕組みになっています。

サワンさんは2人の子供のお父さん。プラチャクさんは3人兄弟の1番上です。

サビトリ・バストーラさん (女性、19歳)

サビトリさんの出身地はネパール第2の都市ポカラです。その中心部には電気、水道が普及しており、近くに病院もあるので、PHDが研修生を招いている地域の中では比較的保健衛生の状況のよい所です。

ポカラから招いた83年の研修生ラダさんは、地域の女性に編み物を教え、現金収入を得る道を開いてきましたが、生徒の中には、教育を受けるチャンスが無かった人も多数います。そういう人たちに、保健衛生、栄養の知識を伝え、また、今以上に広く活動できるように、ラダさんの推薦を受けサビトリさんを招きました。

ラダさんとサビトリ・シュレスタさん(15期生)、サビトリ・バストーラさんの家は徒歩15分の範囲内にあるので、帰国後の協力が期待されます。

ホストファミリー紹介

サワンさん

4人の中で一番真面目。日本語研修中は、常に眉間にしわをよせ難しい顔をしています。真剣になりすぎ「頭が痛い」ということもあり、ちょっと心配です。

サワンさんのホストファミリーは、西宮市の坂本さんです。9才から4才までの4人のお子さんがいて、とても賑やかです。サワンさんは、家でもたいてい本を片手に日本語を勉強しています。それ以外の時はよくお手伝いしてくれます。坂本さんは、そんなことしないで家でもっとくつろいで、と言って下さいますが、サワンさんは、何かしている方が落ち着くのかもしれません。

自分のペースでリラックスして過ごせるようになるのはもう少し先のようです。それとも、今がサワンさんのペースなのでしょうか?

ん。お母さん曰く「もう少し慣れるまで「アフレイドのお嬢さん」ね。」



「私の家族は親切で、元気です。」(ゲオリ)

プラチャクさん

プラチャクさんのホストファミリーは、神戸市東灘区の梶原さんです。これまでに、シャーンタさん(92年、スリランカ)、トゥンティンさん(93年)、トゥントゥンさん(94年、ビルマ)ミノさん(96年、フィリピン)の4人の研修生がお世話になりました。よくしゃべるパワフルな研修生が多かったので、物静かなプラチャクさんには少し拍子抜け(?)されたかもしれません。

プラチャクさんの日課は朝の散歩です。町の生活で体力の低下を心配しているのかしら、とお母さん。プラチャクさんによると、タイでは、毎日家と畑の往復2時間を重い荷物を持って歩くのでとてもしんどいけど日本で歩くのは楽しいそうです。



「この日は私の誕生日でした。ありがとうございます。」(プラチャク)



「タイの家族は5人です。日本の家族は7人です。」(サワン)

ゲオリさん

明るく人なつっこいゲオリさんは、出会う人を熱い抱擁と力強い(力強すぎる?)握手で驚かせています。

ゲオリさんの滞在家庭は神戸市北区の木下さんです。お嬢さんのまどかさんが、タイツアーに参加したのがご縁になり、ホストファミリーになって下さいました。まどかさんは、今春就職し新しい環境の中で悪戦苦闘しているそうで、境遇が近い彼女からの励ましの手紙にゲオリさんは大感激。

山の村から出てきたゲオリさんにとって、日本の生活は新しいことの連続です。お母さんと一緒に外出し、人混みになると「アフレイド、アフレイド(不安、心配という意味でゲオリさんは使います)」とお母さんの背中にぴったりくっついて離れませ

サビトリさん

最年少のサビトリさんのホストファミリーは、神戸市垂水区の森嶋さんです。サビトリさんは当初は小食で、お母さ

ん、お父さんもサビトリさんに遠慮してあまりご飯を食べられず、少し痩せられたとか。最近では、キッチンと一人分食べるようになってきたので、一安心(?)です。

今のところ、おとなしいサビトリさんですが、家族でネパール語を習った時は、生き生きしてとても厳しい先生だったとか・・・。「覚えられない!」と音をあげたお母さんの手を取り離してくれなかったそうです。「これと同じ苦労をしてひらがなを覚えたのね」とお母さん。今は、カタカナと格闘中です。



「ネパール語の勉強はお父さんの方が少し上手です。」(サビトリ)

帰国研修生短信

スム・ソコムさん (カボジア、93年)

昨年のクーデターの際、一時避難中に鶏を700羽略奪される災難に見舞われましたが、頑張って養鶏を続けています。公務員の仕事は週に2度事務所に行くだけです。

ノップ・ヴァナさん (カボジア、93年)

2月に結婚しました。お相手はなんと19歳。米、マッシュルーム、水瓶を作って生活しています。

チル・カエウさん (カボジア、95年)

JOCS(日本キリスト教海外医療協力会)現地スタッフとして働いています。村人への健康教育を担当していて、村育ちのカエウさんは、村の人と同じ視点で話し、溶け込んでいっていると評判が良いようです。週末ごとに両親の待つパティ郡に帰ります。

ミノ・トレドさん (フィリピン、96年)

4人目の子どもが生まれました。男の子です。もうすぐ1歳です。農業も順調です。家族もみんな元気です。

ジャネット・パティルさん (フィリピン、91年)

子どもは3歳になりました。元気になっています。

15期生

多くの皆様に暖かくご指導いただき15期生の研修は充実したものとなりました。15期生は全員、過去にPHDが研修生を招いてきた地域から、そこに戻り頑張っている研修生の働きをより強化できるようにと招きました。今後も、見守り続け、このページでも紹介していきます。

15期生の研修、滞在をご指導、お世話下さった皆様、本当にありがとうございました。

「気づき」の大切さに気づかされた旅 フィリピン「地域組織化(C.O.)比較研修」ツアー

3月末、フィリピンはヌエバエシーハ州に15期生と一緒にに行ってきました。20日から25日までPHD協会と協力関係にあるフィリピンのNGO、SAFRUDIの農村での実践から学ぶ比較研修です。

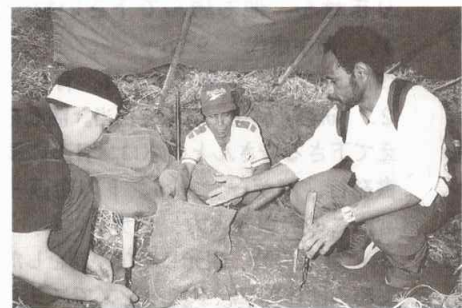
研修生たちはみな、マニラの空気の悪さに顔をしかめていましたが、村に入ると途端に目の色が変わり、何でも見て吸収しようという気持ちがあふれた目になっていました。

そんな研修生の気概に全体がつかれるように、6日間の研修では充実したプログラムを体験することができました。

【比較研修の日程】

- 3/20 オリエンテーション、目標設定
/21 現金収入のための手工芸品プロジェクト
/22 農業見学
/23 C.O.講義
/24 薬草実習、まとめ
/25 SAFRUDIマニラオフィスに報告

研修生はこの研修でそれぞれの興味、関



換金作物である玉ねぎは村のいたるところで見られる

心から様々なヒントを得たようです。

サビトリさんは手工芸品グループの運営を、帰ってからのグループ作りに役立てようと積極的に質問していました。ハリエオさんは自分の奥さんがこのようなグループを始められる可能性を考えたようです。ワニさんは森林伐採のためどこもはげ山になっているのを見て、パプア・ニューギニアでも進みつつある過剰な森林伐採を防ぐため、フィリピンがどうしてこうなってしまったのかを村の人に伝え、自分たちならどうするか考えたい、とたくさん写真を

撮っていました。アンボンさんは化学肥料や農薬を多量に使うフィリピンの農業に疑問を持ち、帰ったら自分で堆肥を作ることを進めたいと改めて考えたようでした。

何よりみな強く感じ、そしてSAFRUDIのコーディネーターからも何度も強調されたことは、地域の人たちが自らの問題に気づき、自ら考え、話し合い、解決していくという地域組織化のプロセスの重要性でした。

まとめの会では研修生それぞれが、日本よりも自分たちの村の状況に近いフィリピンでの研修は大変参考になったと話していました。今回はタガログ語ができる平本実さんがボランティアで同行したため、村の人たちと良い交流ができました。

フィリピンでの学びは研修生にとって、一年のまとめとして大変良いものであったと同行していて強く感じました。

伊藤 公男

# 15、16年前の研修生に会ってきました

3月下旬15期生のヌエパエシーハ州での研修に付き添った足で、久しぶりのラグナ州の研修生を訪れてきました。第一期生として来日したコンラド・パニサレスさん(66才)、マノリト・ロサーノさん(43才)、第二期生のウィリー・ラニブさん(39才)とレネ・プリズさん(37才)は当時このラグナ湖畔の町、バイーで展開されたフィリピン大学医学部の総合地域保健プログラムのボランティアでした。PHDの提唱者岩村昇神戸大学教授(当時)と仕事の上で交流のあったR・カラガイ医師、S・ギヤスマン医師の推薦を受けた4人は82年、83年に来日しました。パニサレスさんはラグナ湖の漁師、マノリトさん、ウィリーさん、レネさんは農業家でそれぞれ日本各地で研修を行いました。

今回は91年5月の訪問以来7年ぶり。

帰国からは14、15年。バイーの町はマニラから南へバスで行きますが車の通行量が増え、同じ距離に多くの時間がかかるようになっていきました。バス停からはオートバイにサイドカーをつけたトライシクルに乗

り村へ。そこは見た目は大きな変化は少ないのどかな農村でした。

マノリトさんはこしはばくは乳牛を飼う酪農に取り組んでいましたが、病気が多く、ひとまず切り上げ、昨年6月からアヒルの養殖を行っています。近い将来、乳牛の病気対策を勉強し、再度酪農に取り組みたいですと話しています。

パニサレスさんはラグナ湖での漁と多くの養漁場で淡水魚の養殖をやってきましたが、92年から気管支・呼吸器の病気で体調を崩し、今は仕事を引退、療養生活中です。生活はすでに成人した子供たちが支えてくれます。今は直接指導をすることはできませんが、彼の生き方は家族はもちろん、周囲の人々に伝わっています。

ウィリーさんは近くにある国際稲研究所(IRRI)で働いています。加えて自宅の庭で観葉植物の苗木を栽培しています。仕事の上では日本での経験が生かされているとのことですが、周囲の村人への働きかけが十分でないことをしきりに詫言っていました。これからの動きに期待



マノリトさん



パニサレスさん

# ～草の根の人々を訪ねて～

したいところですが、今回は残念ながら会えませんでした。

レネさんは他の3人の住む地域から離れた山の中腹の村で果物を中心とした農業をしているとのことですが、今回は残念ながら会えませんでした。

初期の研修生は送りだし組織の体制が十分でなく、組織だった活動になりにくい面がありますが、個々の研修生はいまだ意欲を失っていません。現在、PHD協会がフィリピン国内で関係をもつヌエパエシーハ州の村人やネグロス西州の村人との交流など、その気持ちに添えるフォローアップが効果的だと思いました。

また今回ラグナではフィリピン大学ロスバニョス校農学部にブリオネス博士を訪ねました。彼女は大学では土壌学の研究者ですが、加えてIFOAM(国際有機農業連盟)の理事で、フィリピンでの今後の展開の助言者として協力をいただきたいと思います。

藤野 達也



ウィリーさん

# 『生産現場で考えたフェアトレード』

今回、私は15期の研修生と共にフィリピン比較研修旅行に出かけ、フェアトレード(第三世界の草の根の人々の作った商品を公正な値段で取引する商業第一ではない草の根レベルの貿易の事)で売られている商品を作っているいくつかの現場を訪ねてきました。

マニラでは、地元のNGO、SAFRUDIの工場、展示室を見学。想像以上にビジネスとして業務が行われていることにびっくりしました。

比較研修を行ったガバルドン村では、女性の現金収入のために1990年にこの地を襲った大地震以降始まったハンディクラフトの定例ミーティングに参加。ここで作った物がSAFRUDIのマニラオフィスに買い取られます。今、主に作っているのはシーグラスといわれる村に生える草でできたカゴ。ゆったりとした時間の中で商品のチェックが行われていましたが、持

ち手の長さからカゴの円周まで海外のNGOによって厳しく決められているとのこと。作り手の独創性が失われてしまうのではないかと私は少し複雑な心境になりました。「私達は先進国の人々に教育のついで商品を買っているのよ」とリーダーの言葉にたくましさを感じました。

再びマニラ。今度は、鉄道の線路沿いに小屋を建て住んでいる人々の現金収入のために、日本人の修道女が行っている手工芸品の作業所(アパートの一室)へ。ここで作られているカードは以前からPHDでも扱っているもの。近くのスラムへ案内してもらいました。4畳くらいの部屋に2交替制で住んでいる幾人もの人たち。犬猫のように扱われているという子どもたち。初めて、都市の貧困を目の当たりにしショックを受けました。

さて、訪れた場所それぞれに形態は違

うのですが、そこには、共通してみられる問題がありました。それは、商品の売り先が国内にないということ。

例えば、上記の日本人シスターのプログラムのカードは1枚20ペソで卸しています。一般の市場に売ろうと思えば8ペソが相場。そのため売り先が日本の商社員の奥さんたちのグループなどに限定されてしまいます。作ることができる数が限られており、少ないので8ペソではここで仕事をする人の収入を生み出すことができません。

過去20年で大きく育ち、低収入の製造者に確実な収入を提供し、欧州や北米では一定の市場を確保しているフェアトレード。PHDでバザーを担当する私としては、今後にはむけて色々なことを考えさせられる旅でした。

田中 康代

# PHD NEWS

1998年 2月	122件	1,853,707円
3月	134件	2,206,647円
4月	134件	1,135,274円
合計	390件	5,195,628円

以上の通り、多くの皆様より会費とご寄付を頂戴いたしました。ご協力で厚くお礼申し上げます。

**〇新しい理事会です**

去る5月19日第41回理事会が開催され、任期満了に伴う役員ならびに理事長の選任が行われました。その結果、理事長に今井鎮雄氏、理事に岩村昇氏、金光清行氏、神木董氏、多胡植祐氏、宮崎秀紀氏、森滋郎氏、山ロー史氏、監事に斎藤貢氏、執行孝胤氏と、以上のように決定しました。

**〇英国からL. テイラー先生を迎えます**

7月にイギリス、パーミングム市にあるセリー・オーク大学、開発学コースの先生、ローレンス・テイラー氏を神戸に迎えワークショップ、講演を開催します。このコースは93年に職員の藤野が受講したもので、詳しくはお問い合わせください。

**5日間ワークショップ**  
『Working Together For Better Development』  
日時：7月8日(水)～12日(日)  
場所：ひょうごインターナショナルプラザ他

**〇月×日のPHD協会**

職員 田中 入職一年を経て正職員に。それによって得られるもの一肩書付名刺、若干の給与増、いっぱい責任。それによって失うもの一完全週休二日制。果してこの得失差は?

職員 伊藤 オフィス街にあるPHD協会。年度替わりの時期は使える荒ゴミがわんざ

費用：18,000円  
募集人数：25人  
\*英語で行います。  
**講演「開発協力をを行う理由」**  
日時：7月15日 19時～21時(予定)  
場所：ひょうごインターナショナルプラザ JR 灘駅・阪神岩屋駅下車  
主催：兵庫県国際交流協会  
\*通訳がつきます。

**〇スマトラへ行こう!!**

今回のツアーは、いつもの漁村だけでなく農村も訪ねます。そこで次年度研修生の選考もあり、貴重な体験ができることまちがいない!  
期間：8月22日～8月31日  
費用：一般240,000円  
※7月にはパプアニューギニア・ツアーもあります。(残席わずか)

**〇第8期林業体験学習「枝打」**  
日時：7月4日(土)～5日(日)  
場所：兵庫県多紀郡丹南町大山  
詳しいお問い合わせならびに申し込みは、早めにPHD協会までお願いします。

**〇第13回草の根生活塾**

200年前に建ったかやぶきの家で簡素な生活をし、農業体験も行います。この夏PHDの研修生と2泊3日を過ごしませんか?  
日時：8月7日(金)～9日(日)  
場所：たんば農文塾(兵庫県多紀郡篠山町)  
費用：18,000円

**〇98年度国内研修生募集**

海外の人材のみならず国内にも平和と健康を担う人を育成しようとして95年から実施している国内研修生。今年も10月からの6ヵ月間、1名を募集します。

内容：PHD協会の事業を通じた実地研修  
1. 海外研修生の研修業務を軸とする実践  
2. 国際理解・開発教育など国内に向けた啓発活動  
3. 公益法人における組織運営

対象：日本国内居住者、日本語のやりとりが可能で、将来、教育・福祉・開発協力などの分野で働くことを志す方。  
当会事務所に通勤可能な方。  
研修日：週3～5日  
時間：午前9時～午後6時を原則  
支給経費：通勤費および研修手当  
選考：書類審査後、筆記、面接を行います。  
締切り：9月19日  
詳しい案内をお送りします。お問い合わせください。

**〇パプアニューギニア 千ばつ・飢餓緊急救援にご協力を**

前号でもお知らせしたパプアニューギニアの千ばつ被害を支援する組織「PNG千ばつ・飢餓緊急救援実行委員会」が神戸にもでき、PHD協会も加わり支援を募っています。集まった資金はパプアニューギニア教会協議会を通じ、被災者に届けられます。郵便振替00970-7-39728 阪神大震災地元NGO救援連絡会議 \*振替用紙の通信欄に「PNG支援」とお書きください。7月末までをメドとします。

レーボール仕込みの受身をとるも受付のお姉さん、守衛さん駆けつけ大騒ぎ。あやうく別の新聞ネタの提供に・・・。

職員 谷 理事会等キッチンとした場に出る日の服装が後輩Tとお揃いしばしば。「翌日、何を着てくるか私に申請方式」か「特別日女子職員紺のパンツ、ピンクのブラウス制服制度」を提案。職員Kにより却下。(家族の多いも順)

に感じられました。みなさんも、布を通してタイの人々を身近に感じてみてはいかがでしょうか。(私もこの布を家で電話の下に敷いて愛用しています。)

さて、事務所の雰囲気も少しも感じてもらえたか? これからもこのレターを通して、みなさんに事務所の様子などをお伝えすることに関わりたいと思っているので、よろしく願います。  
(玄白)

編集メンバー：石坂昌弘、岡部潤子、奥西真幸、小山直美、鈴木千尋、長井綾香、中山佳昭、野添智子、安井佐織



**編 集 後 記**

私はPHDの事務所の近くに住む学生のボランティアです。今年の1月に初めて事務所にお邪魔しました。

その頃はちょうどタイへのスタディツアーが帰ってきたところだったので、事務所の色とりどりの布がたくさん仕入れられていました。これらの布は、研修生の出身

新規会員・寄付者ご芳名は、  
個人情報保護のため  
掲載していません。